游客

特別
一12
5095
6止

N2
5095
62

かくてやうく中納言たもとくちやみ給へば大納言
くだぶくなるまよて修法ひまなくせさせ給へば中納言、何う
ハとも思ふるもいたつらハ命をしくも侍らずこそはし
く何のハ行りせさせ給へふとも法やうう成
給へ、おなじ死ぬべきよなめり今さぞし生ていらハやと思ふハ
家うしぐろ沈みていきもふの弱葉に露くちぬ
らんてなりおとりつるなん所ゝ思ひそる我君のかぎろ
思給へ給ふ世ろ、命ぐるしあらぬ、なりねと思ひめるに、
実ろく死をハ我方ハ大納言に成まじき報ゝてこそ

<2002-160>

それと、是のみで厚ぞ田ゆる事、けてハ老のはて泥
の果おもぶ〳〵さハおのれまゝ法人世〳〵あらぐと
ぶ〳〵ふを、大納言殿ハ田ゆるるかぶりれし、
女房、いのでハ大納言をゞれ、一人なしまりてなのめるま
しと思ハせまらんとのゝまふを、中納言ぞ白ぞ示ぶハやと
ハぶをゞ、ゞ〳〵りおの大納言なるまんるま絶、人の將
とるべゝにあらもゞ、あのを廣らんはんつまて、父ハとゞ此
法許ゝまうで殺生てかゝくなん田殺へるを、をきれゝ若
ども多く伐れど、それゞ法をえにべゝ行まゝゞゝるま
にもうらめうはりにハ、おのゝるまを去伐らんと思ひ伐るみけ

しきゝゝう宮めさせ殺〳〵とゆ伐を殺ふ何ゝう伐田ハん
るまをゝゝやうに伐るべゝやうに業〳〵まらせゝ、大納言ハな
ゝるもの〳〵いあらぐゞ、我んなる世なれバとぶぶ〳〵ての方
へバかゞわなくゝまゝゝひ殺て告〳〵ふて業まらせ殺
ひて中納言、大納言ゝま殺〳〵ふ宣旨ぞぶ殺白つ、是を
中〳〵大納言、和づゝふゝ伐〳〵ゝ法〳〵ゝわゝびゝふまゝ、祝
にの〳〵ゝまゝこバれ殺ゝまゝ、功法なゝうんゝゝゆ、ゝ法、こびゝ
おゝてゝて、殺ゝてゝまゝ宮業のおゝにてゝも近ゝまゝ〳〵、
人にもゞゝん言ゝまゝるゝまゝゝ、ゞしをゝてゝて思ひ
中ゝわて行〳〵居て内へまゝるべゝ母えせ、左右伐ゝべゝる

光おらなりかとても我子どもせ人あれど、かく現世後生
うれしくまあえをつるやうにかくるゝかるけるは佛をけうし
にても徳なりけんハ赤子なるめ乃ん乃ん乃ん
みゝけれ子三人聞とわかれど我ゝ
ちうハきつめあきゝへうき所のこゝろ乃せ
ふしたの為ハ墓ぢかりつゝふまたる事もなれど法
加へり乃をかくゝれく乃るこのへりてハ所のゝよゝち
して赤死ちばかりにハをみとゝにまれをんちごに
まれ乃よたのふきつれとゝいとさがゝいひます、かゝ生
ばかの方悔しくゝ死ねゝと思ふ乃ちに来ていと法

けゝちうそ紀て男君女一とゝろよおハすけゝて、
辨こまりゝゝまへハいと恐ゝとやゝ乃子へハ大弼云乃れハ湖面
も恐ゝもおはしまさず、たゞあの美ゝみゝそうれ
くかゝじけなく男子へゝみ世ゝたうふまつらで死ぬと
も、大かゝゝち濃とも朱ゝたりてなど会じたるとヤ子ふ其
より臣ゝ乃ゝまひて乃の大いどめゝ糸乃ゝ子ゝて又内ゝ糸
ら殆ゝハ人ゝゝよ緑ゝゝふるもおなじやうにて猛ちる
るもなけきバ世ゝ求大納云ちるすわ卧てみまゝくゝる
ちうし子ゝハ今ハ墓ばりゝも思ふるけきバ死なん命と
悔うゝすといひ卧うまへり、いとよゝく故子ふとやゝ子ひて、

大ねどのふねのこれくらゐ孫へつ、れくらいかくてけなくうれ
しと思ひてよろこへり、西むこ五人集ひて、こうふまつり
なげよ孫ふれくらい、菓西子どもこうふまつり孫ふハ牧
とも思さて、大ねどふねの方ハ係おいけるをうれくらい
みじうめでたくものよれば、して、食もまわりてふハ海
づけをれん糸りたまひくるふもしげきく成そて
孫ねて、生涙とよ庄分してんどもの八ねるにはらか
ら男ひをぞ、めどちの中にもうふそハしくあそれば論
なう怨こさどくもいで来なんとて、城あるをはまんへう
奥まを立て、ひくの庄ハ勇、佩刀などを取出て、えらせ孫ふ

うハ、ひしくそしくハ大ねどめのこうにをり孫ふてうと
子くしくハ、芝をひしにてもうふしと思ふべうらそおなし
やうに力入り、秋よ孝じくるだうきうし人くしくに
なんくろくよ物くらにる、況手洋多のほどろかつ兄
るを思くやと思くといくとかくうのをもをきんどち
ハちくれりとれば、しくりハ西家もふりてくうはめれど、考う
宮くよ汚しとて失ねる方ハたてまつり孫くね、
ハのくやて汚ぬのくふるどいさものくをひめぐ
けれど、又侍のいをこやうえざうれくうう
うひをりて六七十になくるとで兄をかたハみをりつ

初段てせゆ

そのゝ又なとのりつる、子ども七人もりなどけ家をもの
ゝ
ゝらぞうん、子どもをこそう、糸そう者ぞるるなくう
まくて男しも拾あ世の人ゝ兵稲ハきくらさいちひちそう銭
なん、なこのらん財いうりせんとい男ふ多ま大将どのよおい
きわてハ山家ハ行ゝ方ハぞくもいゝくゝゝられん男者も
いとくゝみもしゝうみつ美ふよりつばもまくうゆゝてまひてん三
条もちぞかりそうけくゝわてきまりくゝふいくゝしをちこに
わまてハ夫ある子どもハくゝかぐゝゝ家もちもちうわ
きりくゝふうんハらしもてゆゆハバゝてもかくてもゝくなん、
れのゝの身ハ三人ハ子どもハちくゝとおぞうあん財ハいづ

ゝうかをんうするそゝ大将ゝたてくゝやいと迫ハ行くもの
まゝくゝふひうといひでゝくて法ハバわくゝに子ども男ひす
つるにハあらゝどうあハゝくゝくうハせめてなくゝくも世に
大将くもくゝはハじ年求ハ苦労にハ子どもをそる
まくゝりくもつうふゝたわてん、我ある我代りとうくゝ
てハのふうつれ三条ハ家ハくゝのゝかハ女性このハ行や、
大将どのも兄弟ふうハくうくしもうぐゝよ物えまくで
死なぞいうこひなくゝ者を思すべハ天ゝ下にのくくふと
もちくハえくまくらハけゝあくくもくらめ方をなくうく
みゝひうゝ猫ないくせくゆくひそいとくくるしねとのくくハバ

ものてゝ又ゐいづれど、子どもあつまりて、云さまざまに、大ねどのく
きてゝ方見ときゝていとゝはくあハれと思てゝ
かゝるゝゝゝ

とゐ〜も時ともあらば、こゝろおちとて、おぼしなげき、
はゝ子ども、母をとゝこあつまりて、悔とかなしぶ所ふさ方、
いとゐかはきゆ、ちゐどもはゝ、若き者ども、こちにうひ所ふて、永法
あるうれはしみまに、こなごらおいつゝ、泣あそれぐり、思
ハ後のはゝ、有べきやうの宣議も、みづからゝ居なんと
若所ふたれば、父はゝ、秋ちゝ、みづうどの住ゝ所まて
所ぐ者ゝ、ちゝ〜とあらん嘆ハ、ゝあしかるべしと、切まの
まふ、母ゝ、ちゝ〜ちるゝ、ゝ〜ちゝにもゝ〜ん、ハ、知いみなど
ちゝに思ゝしかゝ、荒れちゝ、ちゝ者ゝ、おいもゝ者
いとゝうゝめゝなゝ、ゝ所ひゝれハ

永法ゝて、なゝらハぬひとゝわ住ゝて、きん遠おなゝうあ、
そばゝてはふぐ〜〜れはぼゝるゝ、ゝ疾ゝ所ゝるめゝるを
元所ふにつけても、ゝ〜そゝれもゝゝをいゝるぶしてゝる
と母ゝ、彼ゝとの〜ハはいみなゝるゝとて、三日ゝをゝるゝをゝあ
ゝり所ふ、ちゝる者ゝは送りゝ、住ゝ住いゝとれはゝ〜あ
ゆみづれゝゝり、ぶゝゝの〜ゝゝひゝやう、死の葉ひかぎ
りなゝ〜ゝとゝふ、はいみのゝ、ゝ日ハなゝれもゝ〜、きんぶゝち、例ゝ
らぬ者ゝは、ゝ〜ゝにうゝわ所ゝて、病者ゝハ、大ゝゝ遠
いゝと長〜ゝもゝゝり、大れゝとのおハをゝめ日なゝし、こなゝごら
たいめん〜所りゝて、すゝゝやゝうなゝどゝやゝゝてゝまふ、女房の

法服のいと濃くに、精をまけ給へるに、少し青み給へるが、所
もれ給へるまゝに、男共、おなじけれども、
洞川、我もみぢまゝに濃くひて、あが袖ぞふちもとにかける
とみるまゝに、女
神楽は、洞の川は流るゝ紅葉ばかりぞ衣にかけるぶりける
なるべき、なえ野にて、逢坂山、三十日の内にも
きてめれば、今はうゝとにわろう野日ね、子ども、高やゆとのさ
まゝに、紫多よもあらば、法師九日はて、わるゝんとも
野ゝ、おもゝ、すなん花はおもゝけるきかれくてはなれ
めるのに成ぬ、この歌ゝて、なんしゝるゝ、ゝみゝうはての

るなれば、とて、大わ歌ゝを伴かめゝう拾ゝてゝ、ゝ
我をゝゝほどゝゝ濃くひて、ゝゝれば、ゝをゝ、
きゝゝゝ紅濃るゝになんゝけるゝはて、ゝ将殿、ゝは
いざたまゝ、紅屋にもそゝむゝとのゝてゝゝ、今
そのけてもかゝ濃るゝなのゝまひゝ、ゝれざりけりと
ゝ野ゝゝ、紅ほゝゝ、ゝ出ゝなんゝしなゝ人のゝのゝは
ゝにゝゝよゝゝうゝたぼゝれゝしゝゝ男はめゝの
たゝゝ、ゝゝ濃るゝ、女ゝゝ達ゝも、ゝゝゝはゝひ野
もめゝのゝゝゝ、城ゝゝ、かゝゝゝ野ゝゝて、彼おゝ
みゝゝゝて、ゝゝゝあつめゝゝゝ、ゝゝ、ゝの歌

の勇とりもて、そて系わて、夷うけたれども、古人の伝
れよ伝りしかぎなんとてをれば、大和の国たるまこと
ろれば、佩刀三つ、ひとつは家ろ、そひとつは
はもうけ、わろしはうは世界、ては国などるんろける、
大将殿、夷うはあらめ、雲ろをそは出うしの所ひ
ろれ、古の家は、なぞかきん達ふのてるれはゆまは
孫はさりし、別業のろくかをれまへば、女夷、糸もなし、
ろうはかうえしう伝うまへれば得ぶふの方にをり
てんと思ふものまへば男夷、いとまるす、乞は夷
はうまはぞとも、れの社あればおはしなんみれうみ

のんともはらんとお議らひ所日て、城あるちかうまびよを
て、そ体まぞそるもは出らん、などいとちくがちくは
兄ゆるで、豪家と所はしうわてみうと、おわらひまへば
はらすきも伝らず、もと抱し所はし、時皆仕事て与られ
るるしそ申せば、さがしうも考まひんるうれさてに
伝くも伝つま所ふめるを、何まかうとちにのうまふ
め社ばなん、ゆのうと所ふべし、佩刀ふこつは、出もん
お住とそ出うと、一つは、三の勇なわはの勇とおびび
一つとめつる、夷夷に糸したまうひひんは心
ばへのかひまやうなれるどなんのうまへば城

為ゐいと不びんなる事、みづから仕およ仕らぬるを
とも、あるうなんまろ〳〵めにぐしぬるやうに、あか
くまれくまとゝおよ仕りもしあるべひてハたれも
たれもうれがしてふるあ涙もおをとゝて、と
らるばかれ、あゆしくも云ゝ、自らは心いこのさうろう
まむこのばうゝてゐらめ、かゝく元所へばうゝにえるまふ回
じるす、世界ハおの社あらんうぶわそけてもきてんうち
できをきれよ人あればるはもしからうてきゆう
四の界なん思ふ人にくなるゆうにものし所ふるを
たのれ一向りきりゆうんと思ふきる界うちは浮ゝ方ハ

んず加へられゝふ今二とゐろをバはをとゝ達うつけて法
うふまつるゞとものゝまへバ越前国畏りまろうぶまづか
くなんゝ和し仕らんとて立バそゝ返てなど者所ハん、
取て和しゝふなむてのしおなでるをのみいへバとのゝまふ
おびハれのゝて人に縁ハきつゝハせ所ゝんとゆゝまへ
バ〻用なゝらんをりハ和きんうゝ和人達まあらるバと
て者ひて縁をゝまふ也、きゝみゝ方きんを達にかうく
なんのゝまへるといへ者、ホの方、世家ハいを惜つるよ
いとゝうれしくのゝまへバ程家ハを仕ゝ代らゝハゝ元る
と思ふ事、伊を始られバ歳ゝ原の界ゝてゝく和所ふ

の、河南うれしのるすやと云に、誠前まで、なぶ腹ぶちう腹
たゝきて、爪きて、花をゝて、ゆゝぶ石にハおきてもめて
前ゝハ痛かゝゝく、融うゝまるすけてけるうう、雨いてと
こちす、人のこゝぶつまるのまま法らを笑用になし野いん
とや、牠しこれぼしくるほどハゝのバうは面を見おぎら
社ゝまひしひまゝのへてかゝく熱切すかいう見ゝまふ法
法をぶゝう、見えて、かくのゝまふ、ほゝて笠いうれるさが
に、人きゝも赤身ゝ牠ぶるゆや、高ゝぶ行ぐがとは
野ふといへ若ゆのゝ、行ぶかからのゝくか赤ハ見はふおら
ハ又なれバうせゝにあゝ、耳きづゝて高ゝぶやを

いひゝうん、行ゝう俸ゝゝうんとらゝへで、誠前まの帰のはん
や、牠田ひ知ゝまハめぶかし、法ハえぶとはんすこそはし
あゝわてえゝでこれはすらめ、ちゝ九法つはすけうゝ成ゝる
ハたゝの考ゝまふにゝの、京ずみハこの長は家国ゝて加潟
せゝハ、法ゝのをゝぶ、そにてもえゝまへ、みゝとのゝも人ゝく
ゝなゝうんるハ、はゝこはゝゝ、見ハ家も野ゝめよ、の
赤紙じ野ゝほゝしゝバいでゝゝとゝまつゝきておゝせほし、
まづたゝ田ゝはゝゝせゝ、月のまへゝまゝるゝ、ゝどもをえれ若、
うゝゝゝあゝゝれよ紙ゝゝゝるハゝゝや、高紙らん國を
始めてゝどゝゝなゝゝまゝしあゝゝゝゝ、書をまづ思ゝゝて

えをきらせで、今にてもえをまうるべきハ子ハ老れ歳ハ
ぞかゝ、れのゞ生てらんなどゞもゞに、かゝくおろうかてつゝふ
まつらぬ法角ハかゝくはなきれまするれ心ゞゝを、治くよろこび
やえうまいめと、とにかくゝ云えらんを）ばゝとと思ひ
ていらへもきをでは返りいのゞやえんといへば不知物りへ
ぞひくゞみゝろにかしの法しいゝぞやえうゝし、おゝと
まきるの知り、物のゝゝろ、まりゝゝらん人、接をかりてやせう
とゝへぞ、人のゝよ申にあらそ、ゝ角のゝめるし、三日の
夜のおまへとも、いゝゝゝはゝふまつらんと、たゝるどゞれ
孫ふハのゝゝみは、んゝよまゝでゞひ孫ふにゝゝひとつ法

孫法んゞゝかゝやハゝとゝあれハかゝくは法ゝるのゝたゝふ
ゝるまゝハ伊のにんゝし我ゝはゝらん母波孫庶ハ年ゝう
米一斗ゞに出くゞゝにあらそで、今ひとゝハ蹴中にて、たゝも
やすく物もゝの法ゞゝゝ法ゝらゞ、毎の夜孫えゝゝゝへゝハ
三日石の物出くゝ也、かゝくゝきゝあきハ、糸ぞみゞゝえゝられ
たゝゝしとゝ法いかゝみゝゝふしゞ、法ゝ物ゝゝ法ゝおきゝゝゝゝし
を皆兄孫ひてかゝくやハのゝゝゝ法ゝゝゝゝゝ呂呂にてはゞを、噛る
くかゝゝみゝゝへゝり兄法ゞゝゝ人ゞゞにかゝ法んをもゝゝ方へゝる
といへ、ぞふはゝゝゝ、あ角かゝゝゞはゝいゝゝゝゝゝゝひゝゞ兄ゝ、
ゝゝれしゝゝ法ゝ米しけゞバゝゝゝゝゝゝ

ろ、さはつぶ位の米あひて、心よもからそでれば、ゑ、ゑまで
けまぶ、もよ人、ハかくうとに探ろ、をかしうぐあ流、まづ
ホのくろみたうにれハきしほどハやまり形りしごいさくか
のくまへ流るゆゑなざりれこ、かくんぐろしまれ年はよ、
ひもあるあるよ考てぐひて、いやほらかしとちろハみろかこ
のくまふめりしがとのくもくぞホの方いのであれなん、
まくみあくきものろ、みくうくんバ、羅もきんとは形ゆく、
ゆ角かくよしくゆゑさせごとて、二人なぐらかいで
きてたて表ちをぐろ、ゆ、ゆ流くり云ゆせを招
れくうへどゆ入ぬやうにていあ、九流つ位、なぐのくゆの

考よ、祝をもちまりけん、あるおのゑよも大るなりとりひて、
ゆ流へあうとハ流もに云合きて、大ゑどのくゆゑくまふ、
かくまりて流りぬ、ちくにもそハ表ひとりをきん、ゑよも
くれものろ、男ひゆゑさうすぶべくたまハきくる流くの考
ハるうよ人くハ、むのしのゆ流かわくうがきんそいのでかとて
みゆるを、ゆ心げしのかひちもくゆうにやハとていくになん
たゆハりとぐめつる、おの表はゆるハいと心ぐくふううきる
めりしはを、あぐに物きさせたゆハぐ、物くくゆ、なくゆ彩
にもこいくゆしくゆるを、考なおうせ形そでどく考
返てきる流りゆ、せくんを、越あゆ形て之乃れハ小よ

う、及てゝ来ぬよやあらんと、いとゞ物やゝくてゝうれいなゝ
どもていくゝさのこまゝへらんものを、えてこゝゝとなくゝ
しけれどあ者物ぐるわしいたるものを、おろかゝくも
いつての者とゆゝれ、大ゐる者のつゆ所ひてゝる人のもゝへ
ゆのばゝろ、物ゝと思ひゝるゝ乃は世ゝのゝだわ
ハたゝてゝくハ三ゐ世ゝ者ゝまりゐゝ同じるすけゆ者
ゐつれとてみ者ゝるゝるゝひめ女ハゝまゝ者りゝんか
しゝにもわゝるゝゝ代りゝハきんゝちふ
のゝをゝろハゝてゝまゝるゝゝゝうめ行るすも
おゞつのなゝもゝとのゝゝゝ論なくわゞゝゝんをのみ

なんゝれゝうゝつゝもゝどあゝゝかゝゝひゝゝなん
れゝにゝ法おゝゝゝおゝを時ゝもをゝゝき物ゝ
ゝゝゝゝゝ者ゝゝ物ハ夜中あか
ゝにも重びまりゝゝハゝの方ゝゝ我子ゝ男女
ゝにもまゝハゝの方ゝゝ我子ゝ男女
ゝれゝをゝゝハゝ悪なゝゝゝゝゝゝ
ゝハゝゝゝゝゝゝゝゝゝ男ゝ物ゝゝゝ年ゝ
ゝ司ゝゝ、ゝゝ法ゝ法ゝゝ大ゝゝ
ゝゝゝ法ゝゝ手ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゑむ中の矢ぶくろをとりて、左ザ衛門尉殿いと多くしてて、文
紙包まんとてかくすつまてまゐれハ、矢ぶくろ
いとはりなしとて、ひつ、找ぶくろの代りにかぶ、
園のゐいとくなりけるハ、ひとくてよくて、帰ちわ
ゐになつ、はつのすけハかゐ、ゐ、ぬ、なれもくけ
ハ法ゐてと、あつまりてかのうにとらびやきをれやい
おんとくゐくふハぬ、今まわハまほをて物ちゐく
海ひろといへぬ、ぬにうとわりをいひてけり、ゐ度けつうをゐ
ハ、ゐ猴のうとうびしけりと、人世ゐ云、かくんりまか
をてきまへハ、又大人ゐせんとたばするも、先こゐ

ゐまひのもはるをあしかんしなし、ゐるうとをうハ
せふはゐと思ゐるから、えゐ、ゐ、ゐ、ゐ、ゐとたばす
るもせとの二たび三度とゐきりてやたゐふるハえ
ゐ、ゐ方ハて表あるハ、同めゐ考ゐふにも数ゐぬ
も、ゐ度乃はとくにてゐ成ゐるみのゐみはゐ又ゐてゐ
きりなくたがしゐるゐ方ハ左大臣はうりゐてゐ
ハかゐりなくゐくゐ強てのゐまハんるをいひ表す
ぬ、ゐかんゐち部もおゐるをゐ、ゐたゐはゐ、同じゐ
といへかぐ、切めてゐるしきゐうゐわにかゐしけんくいし
ゐ花もゐう思しゐ中ゐくはゐんはやゐんはく

に、えたなる世の人もかく書りて[illegible]の[illegible]りの表、先大[illegible]
[illegible]ようなる[illegible]の[illegible]ふ[illegible]つちめ、[illegible]をそで大い[illegible]もよ
しとおぼしまるとて、[illegible]し物をみるハ、糸りつゝふまつ
らあるけきばみ面花やうにて出入所ふ先の大い屋敷
小の方、[illegible]ぬ[illegible]むもやはまぐいのめ[illegible]う去所ふとの人
なるうちに、法用[illegible]かゞわなし、馬[illegible]調じゝて所く
わかくらけしうす法るゆいらくにの[illegible]ふ[illegible]あれいくかく
[illegible]わて、あのめるなく[illegible]法つゝふまつれゞろ[illegible]からしときき
加ぞ、ふゝかへりえゞとのゝ[illegible]ふかゝとはわうれく
て、[illegible]ゝあがゝとれもひて、かゝくなんのゝ[illegible]ふ法

かで、かゝるふくつゝふまつきと中所へハ法とくにかくわ
ゝゝ[illegible]にゝうあれといくさ、中ハ[illegible]もいゝう姉ゝとおぼ
しゝ不今いゝゝ[illegible]ゝ伝、こゝの[illegible]ゝ[illegible]ゝ人あはせんと、人ゝ社
ぞえるに、さるべよ人なゝ[illegible]ゝゝをしけきとの[illegible]
ひゝゝ[illegible]ゝ、なゝみゝハ衣ハ
えはなゝど、いゝゆゝゝの[illegible]ハ[illegible]ハ生てなてきつゝ法
ひゝゝもはゝわていとゆゝゝのに、ハゝゝわハまゝるはゝよ、
ゝゝづをゝゝゝひゝゝゝもとゝゝるゝなしハ子うみハ
待きたまふるゝもいとはゆなくて出ハ、ぼゝめのゝとこ[illegible]
ハ十ハゝいとゝきハゝよ[illegible]ゝハ[illegible]ゝ人さともあ中方

ちすべうらもで笑くおハもれバ、まゐりてん上せき勢
うまふ、書をゝゝんゝゝまふにも、能く能くしゝ仕ごらも
いとうこけれ者わゝうおハしゝ人る事におハしませバ、
おびゝ敬ゝめつゝのひをかゝゝものり、わたぼゝて、笛
笛吹をゝゝまふ所をゝゝさうせゝゝうひゝれ者、よわゝゝいと
愛懐と思てゝゝわ、わはぢたゝいの世ゝ変ゝ紫竹ゝまふ
矣ハ九つゝゝなんおハしゝ人る、世ゝ兄弟てん上きゝまふをう
らやましげゝゝわぼして、家も内ゝいうで糸らんまゝた
まゝハ、わゝゝゝ能ゝゝごりて、伺ゝどゝの今ゝとハ云ざりつゝゝて、
侍ゝうゝん上せゝき勢ゝまゝハ、ちゝわゝゝ、まゝぎゝきゝれゝゝ

仕るもけをとゝ中所ゝハ、まゝにてゝうゝ、ちゝ兄よハまゝきわて、かし
あくなんにゝる、本ほゝうしゝとのゝまゝハ、よわゝゝ笑ひ所ゝる、
四ゝ人ゝ系りて寒ゝし所ふ、これなん箱のかゝざりまゝくゝれ
ゝと者ゝ右仕ゝる、わぼゝて、ゝかへゝり兄さゝきゝまゝ、兄の弟
におほゝゝまゝせ、司ゝえゝき寸ゝとも、兄よハまゝきゝらんとすゝて
ひ子をゝゝうゝまゝハせゝき勢所ゝハ、学ゝよのゝまゝひて、世名も
弟ゝゝきゝとなん付所ゝゝりゝる、世ゝ弟のひめ矣ハ、ハゝつゝて
つゝみゝじうをゝしげゝゝなんおもゝゝけゝきバ、今ゝりふゝうゝなく
うゝづゝまゝまふゝうゝ世ゝわゝゝうゝゝもゝふゝ、をのゝゝで、兄ゝて
わゝいゝゝしゝゝる、文世ゝ世ゝもゝう、ゝ所ゝゝ、ゝ海ゝゝにわゝう

かちらで男ひやえ孔へる、ことわり、左設左衛
きとしなん与千に糸〜ちひろれば、ひぐりの大いとぶ、
紙のるすはのふまつり孔ふ、幸の俗法いとめてこ、
唯男ひやこ、舞ハ比ふ比せきを孔ふおとらぶ
きかし〜、ろとろなどがら舞〜ちひけきバ、ゆゆ
おこ〜湖をおとこてちん元きり孔ろ、かくるぐこ
ろて、ろこ〜ばいのめしうきこ〜ハ法徒ハいゆりけり、
けの毒こて月日ろこて、女交服めこ〜ちふいづれも、
ろどもお宗ゆろほ〜ていけこ〜のるゆこ〜つくし孔ろ
ろ教ましゆ、かく〜ろどものころびをきけるをけこ〜ゆ

ろこ〜ひろれバいとうれ〜とちんればしろる、九比おとこ、伊
かでひきみきろうち紀賀どわせんとおが〜てえろに、さ
法ぐよこれとおぼしろるほど〜、中紀云の、紙紫の帥
ろて下ろう、にこのに書矣こりけるをゆ孔ろて人が
らをいこ〜〜人ころおぼ〜きぼ〜て、ゆろ〜糸りあひさ
法ろも、心こ〜めてかこ〜ひこ〜ちふて、さろぐまきりにこの
ろゆにろをほのめし孔ろ孔れバいこ〜〜きろよ仿
ろしこゆ変わてげり、たの大い変、ゆのこ〜にゆ孔ふきこの
こ〜かの人をちんいひちこ〜ぎりこ〜法、よ孔ろ、人
ふちもいこ〜〜やろん男ふこの変にや婚すづよ比の変

にやあハすでよいづれとこのつもりハ、こざけんと、こうあ
ゑ、ゑ、ゑ、ハにの夫にとなん思ふいとすてきしし
うバ、わもひもすゆし、ゑふぎのわにとのてゑ、バこみのつど
もりにてゑぶ、ゑべのなわ、疾してん、ゆきのてにさのてゑへ、
よてゑ、わもひ、てゑバ、てゑにてあけきんとのてゑ、バ、
にてい、もく、ともきん、みづのらわてゑんとそれぞ西猿い
ゆちかれ拔、唐やゑ、ゑどてゑ、ゑ、ゑ、

八四はじ、れもしろの詞ゑ、いとゆゑ笑ひ入れうそち
きてゆきしを、是にて和うくしゑ、ゑとおぼしるなめ
わ、年八四そぢうなんある、たれぐおいしてげゑめ志
ゑくふとも、かげのわよるハえ志ゑ、秋ゑまさりて
あそわよ、そぐほのうげゑ百年いくくもそしうなち
んと思してる、かぐりなくくうれくまてる、きゆう四ま
志ゑの為ゑ、条らを行へとのくゑ、ばきゆゑの方ふが
なうらん陰ゑ、かくゑてのみあるをうゑ侍めでなしなば
文行のくからんをてゐれこゑ四ひつるゑ、侍てと
志めにもゑるわいとくゑれくまるゑ、わかくゑ侍の

にうゑゑるがあくゑれる幸、女きゑみゑ八為こそは
ゆくゑ、ばくあくれゆきといへ志、為もふのくをいみで
う四ゆゑ行ふあるわ、まゑゆで八来るそゑ中行るゑ
もゆく、侍ゑを四さ八彼のきんぐちを男も女もれ四ほ
せとゑゑゆくゑ、いみじゆゑ為ひおけしゑる、数ゑらあ
かゆゑさらぐに、女八ゑゑほくくなんあるをけとゑ八ゑべ
て志のゆおうくゑわほくのに、女志なくと四しゑ侍四ゑ条
わ行日ても、后宮の女房志ゆくるに、ゆゑもれ
にも同ゑ入行ゑゆ、秋中にゆのつきみも、かうた
どりてゆ侍ゑうでくゑゆ、女ゆをとに四ゑ侍ゑ為

めにハ法ゐの方をきてまつるべしとぞいひていとゞ
ゆふと、西方にゆせをら弥へとよろこ〳〵ハぢよるわ〳〵り
たまへとのゝ〳〵ハおはしまわ、きゝよ方かゝりくのゝなる
ん、彼大いどゝ弥ふなる絃をとり人のわたゞしわし
ゆる方をいとゝもよれてるとなんゝゝゝ思ふをいかゞお
がすとのゝ〳〵ハぢよきみ雨あの先ていとゝ行るゝ
にをづきどうゝ新方をきらぬゆ行よゆ、なでふさゆ
るゝの行るづよ、人のわたゞきんもうつハ彼とよくゆきゝ
なるんいとえゝるしうゝん、ゝうよ方なれハたゝりまわ
るんと思へゆゞ、ゆきゝせんゝゞわハ例のゝうゝみよえゝゝ

てまつゆをゞゝ、ゆきゝのふ戸てるに思ふゝゝへてなん、今ゝも
ぶゝり行るとて、ゆゝゝてまゝひめれハ、ゆゝもひ新ゝゝゝりけ
ゝとあゝ社よお洞ゞゝてゝ居ゝりゆのゝ、あ南ゆゞゞく
しなゞゞふ居ゝゝの戌弥ふゞゞゝ、きゝはゝゝてゝも、於花ゆの
なゝゝめ居ゝゝ方いんゞゞ、人もかゝくゞゞゝけりと思ふゞゞき、
杉のゝの云ゝりきゝゞゞひ弥ふと思ひてゞゝるゝきゝてまへと
のゝまふゞゞね、ゆきゝのゝりハいゝのゞゞゆちんゝゝへゞゞゞ弄ハ
かゝくなんとのゝてまへゞゞゝゝになんいゝゝゝ社しゝゝるゝゞ、
たゞゝもかゝくもゝんゝてゝ、ゝゝゝ

つるを中野へバゆのつ浦の美のつ野をひろうてゆ
てはも男すづくるすなれど世すをる一人ハかく悩ふぐし
杉原のなわとおがくなるすづくとのつるふ爲きて野日て、
わけるのつぐろはのつまハぐ正勇物しとおがぼすとも疾
きてんいとも犯人くしいぞ同嗚るぐるべし、おるすぐ
ハやくおるつまひよハやはは美わて野くとおれる
のつまへバ暦とわにやるて見つまふにはちるいとかし
けり行るすはのちはらん人くおちう来ハらに志おうれ
つらん傲の物して面けるいてせんとおぼて面の尉
きつらハをつるふ見きみるやわれくるくとゆえるる

形ばかり
へとちやくといろかしてまくとあとなるるすれバ伊
とるるて物うくおぼて今くといてはらう田日も
たくねハぐるするらぐとも和り野くあらんぞおハす
まくやひらん、あ当ひこのくしといひてるてをわり、
おるる二人わらはひるわ、は傲くハのくろ海はせにあハ十
一るていとをのしげるり、いの万ほとおぼしるを、えぐ
海くうんとてるむるをいとぬしとておちるれぬ、
ひるわの大い爰行うけ野ひて、面し野ひてるべる
るども申野へと申くはじめりもはしうれくれ一死し
うおぼえてはいらくもとくやる野ハるぞみ、ぬ方

の三つの事にて、サるなんれはしたるふ、面白の袖八、牛
四ちて聟とりて、十五ちて出こまへりたるもしげ水の
方八世八ちるんおしたる除、三四日のほどうぼ、ぼ元をい
たちりかしづきまふるかおりなし、七日にちわて、
西のいろ、氣法ともにちり所日めはとの人く、義
ちるハきうそく一見で紹ふ、人力れくわとて、我ハ人、
おもの三人わらハひとわ下でのへふわとわしうまふ、
けうそくどもきつらひちる、儀式いとめでし、母わけろ、
ちとけうらを、なぎさにたん本たる、番ちきに出入
いろだちふ事のかね、ちでけなくうれと思ふ板物

かけて、帥いましけるかねきるべしてをびとて入め、四の元、
人もいつのひなくあらぬ、ぼ面もかく起居てえちまへそ、
かちふまじうけわと思ひなくてちん出てちひたるふまあ
ありけちひなどみをちまぐなれば、うれ社と思ひたわ、
やえちやひたんちまハやねぞ出ぞ、ぼめきハ出てやひめふ
のちいぶす四ふらんと新ちまへ、ば文序くやちま
どんなぐよたぐひまをたるせちも諫ちる、ハ思ちじ、
かちみんあちぬたい記しちちうかくくもちあ
るぞまぐ矣を例のたちうみゆうにやいちびいちん
やんて、四日ちて、時くやちあしうどぞちあきりし後

なんまはだりにてやみぬましうばと悔しうわしいちおほ
ゆるぎをかしまされどいのうこうひ所ひて二ところ絡ものごら
れたてられしてりおえ〜めぬ所はきみまぐ帳の内よ寝
〜ものり、ものの〜こ、起〜ものまへうおらし所ふかどにろち
所文もて来〜ち、男君とり所ふて、先天仕ら方ほしけ
まで、ゆくけんとおほするもきうんとそれん後ふい必
天をそまへとて九帳の内ろ中に入〜ものんばのこと所
てきり所へど、ふ〜しもあ〜ぬ所ぞけぞうみゆえ
んとて、引あけ所ふ所ふ天、彼をぬめれもしろれうま
社去をしれし文を杖をひてみともやあらんと猶つぐ

社て田ふう、ふ天〜ものをきあば
あふらとよ、ひうそのちはよきをぞけ〜ふ君田が
新うう〜ろ社、いたのきて意よ
ふんをける、ひのへりもやえ〜ものとあれどいらへ
も考〜はをず、れとどろしふ文をばせあてのものへば
何よゆう〜うおがすなうんとていけ出し所へ社ばいけう
出そへ〜あるとて、ひうつり所ものて文意入〜ものふば
やへ〜と、祝ぬなど〜てをめ〜てきふ田のきみいうりるも代
為よ天〜ものひつぐうなりといとそづか〜ていえをみ
にも出〜ろはず、あ者天ぐはし、けやへとの〜ものへば

物もおもはぬ所で出、

家なるぬ意のみたけに、ありて所海より、

涙の高砂ハ、ちりてとどまらん

とて、引むすびて、ものしゆ所へれば、はるぐあ角ゆうしのうぐや、

此のへわるハ、ハで中みめるこころ杯をしられと云わるま

へるとまいとをかし、使う物うづけさせてまつりうちハ、

出のサハるうなん、所ゑ意なん日あるうりられバきち

ちらるいとうかし、かうてたのもいどのよハ、言るの夜より

るいはじめるるうにまうけてうり、人ハうぐかし

づきいるるになん、をとも出よんぐしもう法ものを

と、いとおかしゑるかわいりて思ひるる、細のにとに入る

べうにてるはじめ、ることを社バ、はるのなうん

いとおしゑけちゑへバ、ぎみ、苦我を見もぐあ所して

るの思ひるられていうにおもほしうん、あ古使ハんる

めを見ぬやしゑるおぼゑて、使のに、まを見はじめ所し

をわ、うぐあてやんぐと所くのみたもほ方ちりうんを

のうまへバ、夜いとうくほうきみて、けて意ぐとぐや

ちうぐひてちまうよわて、かはれちうかとうひうて

らわてさいるゑれし杯こそ、いみぐきんぎしハま

さわしかうち杯思ひめしうるしちうこれ、ゆるこの

なひうるるのれ、見ぐ所へうるいみぐうてうじかをて

のちにぞ、ちゝそゝぶばのわかへり兄ばやとそゝん男し
しかばぶみ天のるもかくするぞ、ふのこゝはうゝし
と思ひそうや景ぞみるどゝ行そゝ人ありゝ
のゝまへばこうゝてもう社ゝとのゝまふ時ゝこうゝ
りゝとゝまふゝそゝるめればゝろゝちゝまゝめ世仕ゝ人て
に物うゝげ、饗なゝどゝとゝ考ゝまふ日ゝより八日ゝけ
てなん出ゝ法、物ゝしゝきゝけうゝめやゝしだも
ろゝふらゝとゝりゝいゝふゝぞゝにあらぞ、ろゝち社云、
きゝのゝそゝぶゝ法ゝづきゝほゝどゝかゝちゝかゝし、ゝゝむゝぞゝゝ
どゝも社ゝとゝおゝかゝうゝるゝをゝ物ゝきゝばゝまゝのゝわ、ゝゝれゝば系る

にをゝゝりてなんあゝまにぞ、かゝうゝ人もなゝしゝゝわ
ゝふゝまゝひゝよゝ、ゝゝぶゝらんといゝゝんゝ人めゝしゝつゝめてゝはゝやゝゝたゝも
ほゝゝて、日ゝはゝたゝ十餘日ゝゝゝゝんゝあゝゝとゝのゝゝゝゝへゝば女系、
書ゝのゝなゝる法ゝゝ、ゝゝゝもゝゝゝゝき人ゝゝ、をゝおゝゝてゝきゝて
りゝて八伊ゝ侍ゝとゝゝゝゝへゝば時、さゝひゝとゝわゝほゝゝゝりゝぶゝれ
とゝ和、たゝぶゝゝゝひゝとゝ日ゝふゝゝ日ゝ兄ゝゝゝゝまゝひゝてゝゝみゝゝゝゝまゝひゝゝんゝと
やゝと、わゝぼゝしゝゝぶゝらゝひゝゝゝゝまゝゝふゝゝきゝほゝいゝとゝゝゝやゝにゝゝらゝゝのゝし、女系を、
ゝゝゝちゝゝうゝゝちゝいゝをゝかゝしゝはゝゝゝゝゝあゝゝりゝ、ゝゝゝゝやゝいゝかゝぶゝあゝゝゝんゝゝとゝあゝゝの
ゝゝゝゝおゝもゝひゝゝゝれゝど、ゝのゝゝ法ゝゝゝゝゝ

ひて、法ぐろに行るゝもまくとて、そはかうむつふ
きばかりまうハあらめ、聟とり、いとくさむつふるハとわ
らひまゆふて、はおろわ、きるゝ人、もつ方じなは前
にたゝ美野へり、車こつして、わりなまめ、爲らあわ
てるゝ子ぐちとハ行うそ系らんなどいひ、れハ小の方、
牧糸まとまひ、牛ちり野ちつ、赤ろひてありき野ふ系る
もゝけきばかゝ故ゝ子ぐちいつこのとも代り居ゝふ系、
はんいのからんきん遠のれ為、あゝいみぐうもゝゝぐよ
かゝふゝで今ゝ時の市筷とて、おしゝてうらんのなど
わゝのぐちいひあつ、はけゝめ腹とて、ゝ印ハ指のゝ、

ゝ印ハ殿人ゝ冠ゝまゝ行てある、ゝはゝ死ゝゝ後のを
んなゝ十、二つゝるをのゝぐなん男ける、ゝ二人をなんゝ
野ゝくゝまゝとて行ゝつくゝ指のゝも式部の文も送りをん
とて嗚野ゝ遊ゝ奏して皆ゝぐるにゝちかつけ物し野ゝ
ば人ゝこの知ゝぐゝにとて給二百疋深草ゝとゝみれ嗚つけゝ
まゝれば野ゝきみゝらゝぐゝとなゝらべて、爲ふれんゝゝなゝ、為
やゝんやゝうもゝ行ばえて、母きゝゝ山才に云やゝるかゝゝくの物ども
せゝゝて、消ゝもゝ行あれどいこの志ゝゝ、反ゝ行はべゝる人
人も爲ゝうゝゝみゝゝて、ゝいひあゝゝにべゝ人もなゝ、いゝと云て
ゝゝふ行ばえゝさせゝゝゝ人を不ゝ行むゝゝ

ぢうをゝ、ゐびてわるぢ孔へと云やりけれバ、心のうちゝ、おもを
ひて、かゝるなんいひてる、板さり思びてゝゝてん事ゝゝバ
とのつまへバゝのびてと思すとも、人を面ゝゝきらでやゝ板
なぢゝるにきてら〳〵犯るあてゝへる、子引さげてわる
らん、いとみぞしうらむうせゝ人る書はゝゝちとて十
ばうわゝるいるをゝうちハ喰ゐて行うひゝゝゝゝめれ者
いとゐハ社ゝあり、赤九の大い面はうへうりゆたゝゝふて、よ
かゝしとみゝゝゝてゝ打ぢ孔へゝりへで、北の方いと絃ハゝ田
ひて、あの母おゆ海しなゝゝバ、秋子のおゝてもゝゝでゝゝぶし
てんぞゝとて、たゞ蟹ゝにひゝゝみ孔ゝて行るゝもは面

ぢおゝゝそんうゝゝきゝゝハ、えゝやゝゝゝゝみゝゝしかめゝ、赤ゝゝて人
をゝゝゝゝ

ぶく、うし、がわ、帥もうれとも田ぶハざらんす、ぬと物
しるとひなん、びんもうるべとといへ、ゑきてゐ方、うれ
とちうでゐる、ゐらハゐみづうらおけて、うちれゆんと
ヲに、ゑせうろうとていとゐひ〳〵なん田ゑ〳〵ゐ銭、
ゐううらゐまゐヲれうらゐぶく、ごほ〳〵おハすべうほど
も、ゐゐ、ゐりもぐく、なく成うれハいとあハれゐんぼ
ゐうゐ形ん、ゐ、ゐうよれゐ、ゐうに京ゐおう
せんかぎうハゐをらんとゆゑゐぶゐんにつうて、ゐうゐ形の
ぐうらけ〳〵れゐうんなん、ゐうめゐゐうぐひて、ゐうりもむう
へもゐ、ゆう、其ゐうひゐう、ゐ、ゐうハゐゐゐ形ゐ

そゐゐうて将てゐぶゐふとも、一人おハきんがゐらぼ
ゐ形ゐうとて北の方ゐ形ゐう〳〵、ゐらせ形ふうてゐゐうんとゐの
ま〳〵ハゐ形、いと田ふゆうにゐ形もひやりゐうて、めでたくぶれ
形ふうれ〳〵うあらはゐ〳〵よはんてうゐ、ゐ形やの、形ゐうゐ
ゐ形ぶちゐ形ふゐう、物いゆうひなゐれを田ひていゐうう
形ゐうよハきゐうゐ、ゐうハゐの物〳〵ゐらんとて、ゐへいくもく
ゐゐ〳〵形ゐ形ど、ゐ〳〵とゐ形ひうきふにゐうあらめと田ひ
て、ゐ形ゐう女ゐ田ゐ形れゐ形ゐ形ゐよおハす、いゐで物ゆゐさせんと
いへもゐ、ゐうゐ〳〵にてゆゐ形ゐんゐとあへめゐうゆゐうハ、
ゐ〳〵ゐてゆゐゐうゆゐ、ゐうでゐ、ゐ将ゐて、ゐ形ゐ〳〵なんと、

いへぞ、あぎみぞよてのでたいめんをむ、さてにもいとうひ
くなんおもほえ侍ばいのでをうらんぞきのふやこうり
しとのまへばそちかうらへわうり所ばこうこうつ面ひ
せんほどゝ、物しゝ、己がみるよなんゆしうるべうを天ゝ
ともさゝにうてらせてまへうし、人ゝ侍らばうろ、悔ゝ
をれほうこめ、をうれき人ばうりなんうれを仮ちうるべ
くば放きうる方ゝおき侍らもむ京うゝ物し所ふべうを月
ハうるけふあすぎかわくしたいめんなくてまいのでかうそと
のまへばちうあしとゝ侍くゝを年をうんかゝあうもな
けうるめ侍といへぞうゝ地、をやうろゝうちぐめてうるる

にうてしをわうまへをうゝ地よう系わ所をんうるハ狂あゝくなん
めうといへぞ、ハ孫、ちうばかくなんと物ゝ侍らんとうてうみてバ
ゝの方、かうるゝ、ゝくゝそぐ侍うし所へよのまへばうけ所
ハわぬうてをめ母ゝの方ゝ侍許うを来て寝ぐゝせうまへるお
ろ後ゝさにをゝつるやうにかうゝ尤乃大い面のうへ乃ゝた
まへ海のゝ、ゝかゝといひて童ゝ知るゝなれど人ゝよおとる
海ぐゝ友あわかゝくゝちうみうゝしかゝ心ゝ年ひをものの
なわうれうを云ゝ侍うゝ侍べうをを、かぎうなくゝううを
びて、ぎにゝゝくゝもわうぼゝうわけうゝれ、三の来もいぎ
まへ夕ゝうりてうもと思ふ。ふとのゝ戸へばいゝよへのならん、

ぬなどやよろしう仕らんと云、時めれば、うちうちの人の
きぐしなどふるくなりかうる衣どものなまぐいとくほし
たかくしあつらへ（け一本脱又アルヘシ）にやあらんとのたまふ、九の大い君、わたり
給ふとゆて、内衣（ぞ）などそてあざやかなるもあらんと思て
わていとときめきたまふ、おとゝの内衣（ぞ）一ゝ、みひめ君より料（かう）
なる一領（ひとをぶり）、ちひさき人々の君きをきりてまへ、猶こハあらハな
涙のみくもりてとてきりて、ふかのこうちきなどぶるもの
がうぶりなしい人ハうみつるこゝろもまこゝろ
えるべくもあれ、あまこ七人あれど、かく細うてんらびかへ
りえるやハある、物のはじめ、そのなりあれきゝ
つるをたそしひつるに、ほうきくもうれしくものこゝろ
きいうもんゆゝしきもらぶも、帥どのへいたゝはうらひさ
涙ごのかぎりなくうれしきしけれ、さるめれば、車ふる
してわりなあ、ほれ文いとうれしと思ひて、ゆたの者
さきかゝ涙むにめハぬぐろれほどういと大きに、をかう
ちうもぐまてわれバ光かよなでいとくのなしうおぼゆ、
見をいうにして、率てくぐら涙と思ひるんみぐれ
ぬる、まゆがとまちれんちかしまるといへぞのゝ、
たのわほいあるよハ、きのくのつまひたふいとくたる
なわ、まこゝがえくる物、これのきゝ涙、あの尊ちり

たゞハるといへゞ、かくいみでくのつゝまひれらぬしたる
人ゝをなどてむうしおろかなり男日ゝ出けんまゝがうく
をなん中〳〵祝ゝちにまゝとわて、あれは食室をるん
一ゝ部ゝつる、人〳〵の好ゝ東、れ帳屏風ゝらはじめてなど
おぼゆゝをゝれうゝきゝつゝはゝざゝらゝはしのばゝゝみゝゝごゝち
もいゝゝでゝるゝましゝゝなんうゝれゝしゝまゝゝゝくゝゝぞゝわゝの方ゝいゝゝゝゝ
はゝくゝゝの海をゝゝん見るゝ余ゝゝり部ゝゝけゝんなゝゝる部ゝ節ゝ
ゝゝゝゝ

仏神のきこしめしおそれふ、宮の守のぬきりて、人々は、
ぐ、ぐ、ぐ、

きふ、年の多うつむハ広きしとて、三つぎかりしてゐん
おうてしけるわのうたいめんして、ゆ衣ぬつるるもの
ハ出ぞ、田ひやるぐしたる社もくは仕うてゐる人くに、
わのうくいくくくきてゐる扇二十、蠟すりうは梯ぞ社
強の第よ白粉入てちゐ社人のうちひたうてから
たみうゐ元ちゆうてうてうちず、子ぐもも田みやうう
ん社ぜきて、人うり田ハうくとうう社くくく田ゆ、人も
めでたういみじとおもひて、たのくくきりてかへりて、此
扇をとうふくれそくへ社ど、彼扇を見つれバ、儀式よ
ア社はじめて、ゆうひうくて見仕うう、んうそうつう

の社あうそれつうふまうらバやゆ、ぞめひていひあつう、つうあ
てみあり、
夜べハ、ほど五ん年のつもわを、取うつてゆ右むと田野
ハ、を、夜みじうきうちくてはうるゆ方をううめ
ううあうそれうおもひうれ、
きるくと、宴のらもええのうてゆきるかうあけんほどのは
るんうよ、まくくてそれほどえうてうよ、とて、まゆ社強の
浅衣褄一ようひう、かつううにハ、ゆ身のはさうぞくき
うぐりうくくの織えのうちかくうまうくうまゆ、上くハ扇褄
の大きはうう濃くる鬱ぶくうう、中に扇百入れて、

おぼろひとまくり、みちひきれ衣ばと一ちまあり、はは
むすめにおうをおへるる法べし、かつうるらにハはきう来
一ぢいりつうるハ黄金れ多よきろいもよ入てきちち
ひさしはぐ〜れ第入りうけ〜をべ々ものとむつし、
姫君のゆゑ〜ハ
々ものとやはれハ、きたらぐちせんとなや、
きあどもいてゆぶてきものと、あんさくなどかぐ〜れめ
ちちうちていちおぼくのあしやうとかく〜もあるハてき
なんものとりふ、ゆつうひとりに物うぐ〜ぬ天はく〜う
やうはせんのうれて、

ゆゑ〜ぬ、ゆきはてぬきにつて方もれば
えうぬ、ゆよハきてる物ぐ〜を、人〜るるもうれく、
いみじう物さ〜がつて
ちなんあるむしはめの天れはかへわ、
られちちかまはどぐ〜ゆえさせんとれもひて方
へるほど〜なんおくれめものハ〜にも
分をゆて天ちしてるる物ちハゆくもときはも思ぐ〜ましく
ちなん者けるふの方ハおちひめのへりをうんろて母れ
方にとそれろうしかちく〜いるむすめうにちんありけるも
十に天ハ成なんとしるふいうでかんせ生ちんとするあひ

ゑで死んでるとなんくばゝの云いみだうかれしうてきれいがらそ
保のごとハやゝ云ひうしかゝきひてれんとはいうハすにゝろ仕る
め社をゝゝ浦わきべほゞてゝあらゝ云心づくしになるば
しろ、ゝろゝもあひ尺仕らでいやゝ仕らでといへゝ云母小のゝる
ゑやハしるハせし尤の大いゝのゝ云ゝひしのばかなゝるめを
尺を形ちんとて後ぎゝれまわざを云ゝもしけり、行このう
行ゝと思ひゝんとのゝもへばゝ尺れ爽、ゝそいゝてのひなし云ゝし
のほゞゝてもいけをゝる浦べゝすゝせゝろハ仕らゝめといひ
なゝゝゝむかゝ社、せゝろかゝゝばゝうやハ釈ゝのゝれハゝをゝめゝど、
かゝるゝゝ云ゝけて浦ゝかゝ、ゝゝにゝゝしゝゝせいし屋ゝ、

ゝ

ゝちハ尤の六い云ゝ浦ゝゝゝゝ中に糸ゝ形ゝ、ゝゝたい面
云ゝゝふて、物ゝゝゝ形ふ、金仕ゝてもんゝぎし仕らしをゝ
ハまゝてなん、其ちひゝゝゝ人ゝゝゝゝ仕らんをゝゝゝゝ
せゝゝ形形ゝ、古れゝゝ云のいゝみゝゝゝかゝゝゝゝゝゝ
ゝばゝゝにてゝも生したてんゝゝ物し仕ゝゝど、彼母きゝゝゝ方、ひ
ゝゝものゝ形ゝゝゝゝめてんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝれ
ばゝゝゝめでなんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

のこるぞひさくわたるる矣ハ柴つぎそへバ、ひのき
みゝ十一だうわといふく、ゝくバ、老ゝ[illegible]そしおとゞめいう
をそゝれきゝもゝ沒へりけるといよもをかいろち、あのこ
ゞちみとのへらんす、行ゝうゝ向へバ、ひれ矣、行う
ゝちせんさゝゞで物もなんれバどんゝく所つゞろちいと
いふゞひゝゝるゝみゝゝゝゝひゞゞゞゝゝて、徒ゝ[illegible]
らんとわゞゞしゝゝゝとゞゞづゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
なるんそのゝゝとうちハ四ひて、殘るゝみゝけるゝと所出て
わゝゝなゝ三人にて、縮四疋、殘一疋、落枋一ゝん、きゝ女ゝハ
きゝ二疋、すゝう下位くゝハ、縮二疋、落枋加へてゝらゝん

きバそゝちハ時ゝけりと四ふ、ふちて、時ゝ来りて、曉矣ゝいそ
ぎゝゝていゝゝゝわゞゞしゝのゝゝ注ゝゝかゝりなんるゝを四
ゝゝびてゝゝのきみをゝゝつゝて注みゝるゝほゞゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

おもわぢでなれば、
今いとて、峰清きるれひく母れ、領ゆふる袖と云るぐ水てく
ゆゆくくくくり人を絡ひ、ちくゆくえで
とおこてわ、れもしろれ初のつきまれば、れ初ぼ云なくあぐ
はしたれの去いづらんときこれ方もえて、れどろくくあやし
おるにの夫、あきれくと云契りなぐもきいのやうにもせ
ばりしのぐ、田ひいづるるなくれど、色を云るにぐ、ち
きぐに田ひをくく、かれはられを九の大い夜れ姫えく
きり形へをいへで、母小のくく、をかしき物くくろあえ
れ、れもきまれと云めれども、口の夫も れくづり

きくまふめるものをとおもひて、よくのゆと云かれるれ、れくと
いひて、永をきらんとて取てぐわ、れもくの紬ハおもひよ
らぐりくれど、妹どものんをけれバなどいれバと思ひて、
るぐにやをとてきくるしけれ、花ハ人くてきん母ハの方かく
りくる、富の時す落くぐりぬ、車すきわなんをくけれ、
れ母やれれとくゆくれと富を百らぐりくれバ山時くも花
くくで、所いくくぐぐにくくれ、送りの人くも落くくく、
くくづけてなんうくけく、琴のくぐ白ぐれこくり集り
白ぐくれ物ぐり、家やハをくくとのくまくるをくれバ
笑ひくなくくくひ形ぐるれ方、表ぐハ花ぐる

よきまで意法ゝれどゝ、ゝ、ゝろゝゝけをバ、ゝゝ法きにゝゝ
ゝゝちハ、扶ゝ廣ゝ結ゝゝゝて、ゝゝみゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ハゝゝ、ゝれ大い夜ひゝゝゝゝハめゝゝゝゝゝゝ、今一とゝ
ゝゝゝ、ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ

ぢうじ、そなんけくしむべきまに仕れば、まをわ仕らん
と田舎ものの中ぐらまよまろ
ぐとにまわらでいとじんなうぐし、辞しまる代りま
ハ、九大臣をなさせ給へ、才豪きろうハ仕らざめり、仕まバ
第ちりもけしろ元ハいとくき仕りなんと、所はみや
ゆせめて奏けきまへバみてのどけうハ、生て物し給へん
ろう嘉しうらめとて、九のおくを太政大臣よなしまま
り給ふ世人、まぐ四十ろなわ給ちで、位を極めてまへる
ること、おぼろあつり、法むけめは女御、后よ居てまひ
め、宮は輔す、ゆおを中将よなしてちんせき勢ぶまに

ける身法の位ちち皆ちろびし給ふ、左の御の兵部は位
九を法のかるすなり給らめ、おはぢおとぐ、系兵法のす
けきおろくなし給ふよのくまへバいとちなくなくるゆお
の社ぐ子はくぐりを、るは社はぐめくハ以ので出仕らんを
中殿へバ、殿ハ法ろうハ第の弓部ろ仕れバちくるのハ人は
そ志りはらんはくくにハは左部、九近のつくるに宋にかか
バくみハ右を社ゆ特よな勢、叔父にて、物よなりおとる
ゆうやハくとのくまふて、ようくちぶくくう四殿ふめり
し内ろうせちに奏きさせたまして、右を法は社ゆおろう
ゆうし殿ふ殿ハ殿ハ殿ハ

ばこそ我つのさかうむりもゆづらましかとのこまひ
ける、書時きつきつとそれ弱夢なわや大いどみくわの
うつれはさいはひをめでうとハ古めかしや、落ぶぶ、
ひとへのはハうまれほどもて、かくさ段方たれの方きたるの
はなるとそれ弱ハぶわきとそなるはむつまれ人くハ家よいひ
いひたる、三れ夫ハ中宮れはそしげどのようなんもまり
弱日々添、うちハ伝たていとまらかすのれ夫の来る
るときうれ方うれをれば、しるとわりでうし、かくは
このん弱ものを、かくそうもや、神ほとゝもれはばけん、とこ
にも死なでなんいもしたる、大いどみくふの方。いとゝかく

老ものふめわ、功徳をれしほをうのうもひて、戻くいとめで
たくてなし弱へりけるを、ようそうびのうもひて生ぞうけ
る世すあらん人、まこと子悔おむなはぶくなんうれくもも
のえんをけるうのうもて、みお腹ぶち弱つ時、急れほうと
吐くハ我を戻るなしまつりうゆめ子ハかく抜きこれう
りけはとなんのうもひたる、死ぶもひて後ぶもいぶ大い面
乃ばうめしうまうもひける、陳つハ宮の四位よなりうけわ、
後くのうハ次くうも出来べし、はるのゆ将れ亮ちつよ
ろひうなん羅遊うもひたる、れはゆちおとく亡弱ひ
れれとも、弱男はぶなくれとしそと、かくすぐのうもひ

けをばらばらくやんごとなきものゝうへ、東の夷をば思
ふまゝにしたがふ、左大将右大将とてぞ、けぐきてならはしあるわ
ざなれば、世きこの方は愛敬祈つゝまゝとも強くとゝ
ふ、ゝちハ世愛敬は徒ゝて、大納言のなりてゝわ、おも
しろき物ハ病おもくて、法師まなりにくれバ、ものゝ
えぬなりぬ、典薬の助ハ、激られてを病ひまして死ぬわ、
ちゝ社ゝゝておこりたるを、不動ぞなりめるぞゝちとふる
どてゝうゝわ説きせけん、きげし生てわいてゝうんものをとゞ、
をとゝ君はゝゝひたる、世間の家国ゝ、おのゝ家のゝ
それゝくいみじうえけれバ、世ゝの安濃ハ今ハ典侍

にたるべし、なゝしのそけハ、二百まていとゝわとゝや

寛政十一年己未仲春日

書肆林

京都　額田正三郎
江戸　須原茂兵衛
同　西村源七
同　宗七
大坂　葛城長兵衛